平成 27 年度　管路更新耐震化プロジェクト　第 24 回水道フォーラム

平成 27 年 5 月 29 日（金）に横手市の管路更新耐震化プロジェクト第 24 回水道フォーラムに出席しましたので報告します。

最初に横手市長の高橋大氏から開会の挨拶と、管路更新耐震化プロジェクト第 24 回水道フォーラムを開催する意義について説明がありました。

その後、グローバルウォータージャパン代表で国連本部テクニカルアドバイザーの吉村和就氏から「中小水道事業体への国際貢献のすすめ」と題して、拡大する世界とアジアの水ビジネス市場の将来予測と日本政府の対応、アジア個々の国々の水ビジネスの現状とその市場を狙う視点を話された上で、「中小水道事業体は国際貢献を行いながら人材を育成しアジアの水ビジネスに進出してみてはどうか。」という大変斬新な提案をいただきました。

世界でビジネスを成功させるために必要なのは発想の豊かさとのこと。会場に向けて「マンホールのふたが丸いのはなぜか？」との問いかけがありました。これはマイクロソフト本社の入社問題でビル・ゲイツ氏が直接質問する問題をイメージしたものだそうです。ワシントン州レドモンドのマイクロソフト本社に入社するつもりでみなさん考えてみてください。

会場からは、日本の水ビジネス市場の規模が過去10年間で 25%程度減少しているのに対し、同じ先進国の韓国は 30%程度増加しているのにはなにか理由があるのか（メタウォーター　富内芳昌氏）、平成 16 年の水道ビジョンでは「国際協力を通じた国際貢献」が明記されており横手市などの中小事業体にとってそれは本当に必要なのか考えていたが、中小が職員を海外に派遣すると中小は職員数が少ないだけに1人が職場に与える効果は大変大きいというメリットがあることに気づいた（横手市、東北みずの会、杉山達範氏）、海外に職員を派遣する場合には行く職員が現地で腰を据えて活動するためにも、次回以降の職員が進んで手を挙げるムードを作って派遣を継続させるためにも、職員の努力に十分報いる待遇を確保すべき（クボタ、東北みずの会、草野聡也）といった活発な意見や質問がありました。

また日本ダクタイル鉄管協会東北支部長で元仙台市水道局次長、東北みずの会会員の安藤

健一氏から「震災後の取り組み事例と復興への貢献について」と題して、東日本大震災による仙台市の水道施設の被害と復旧の状況、震災後の取り組みについて説明がありました。復旧では新潟市や札幌市をはじめ61の事業体から応援を受けて大変助かったこと、震災後の取り組みでは送水系統の2重化や老朽管の更新、一元化されていた危機管理体制を変更して担当部門に情報を分散処理させる体制にしたなどの説明がありました。

会場からは、東日本大震災の時に下水道部門には「水道局に電話してもつながらないので下水に電話した。」といった問い合わせが多数あったが、仙台市では他部門との連携はどうだったのか（いわき市、木村雪乃氏）、被災地で普及しているCM方式のデメリットとしてCMrとなったゼネコンや土木コンサルにとって水道は特殊分野なのでCMrの技術力が不透明なのは理解できる。これを解消するための有効な対策があれば教えてほしい（フジテコム、有吉寛記氏）、口径別の被害状況で口径 40～50㎜ の管に被害が大きかったのはなぜだと考えているか、また今後の対策について教えてほしい（ポリテック、白澤洋氏）といった現場に即した意見、質問が多く出されました。

最後に横手市上下水道部の小松田将氏から、横手市の水道事業全般に関する説明と閉会の挨拶がありました。

吉村和就氏の「中小水道事業体が国際貢献を行いながら人材を育成し、アジアの水ビジネス市場に進出してみてはどうか。」という大変斬新な提案と、「中小事業体が海外に職員を派遣すると、職員数が少ないことが幸いして経験が組織に埋もれずに職場に与える効果は大きい。」という杉山達範氏の発言が印象的でした。

また安藤健一氏の講演で有吉寛記氏から質問のあったCMr（コンストラクション・マネージャー）に対する水道技術移転は、「被災した水道事業体に派遣される新規採用職員も含めて、紆余曲折を経ながらも教育体制は徐々に整いつつあるのでは。」とのことでした。被災地の1日も早

い復興をお祈りしています。

　また最後になりましたが、管路更新耐震化プロジェクト第 24 回水道フォーラムの開催に当たり、事前の準備と当日の進行実務をなさった横手市上下水道部の皆さん、立派なフォーラムをありがとうございました。

東北みずの会事務局　草野聡也